別紙様式３（修士申請者用）

# （西暦）　2020 年度　博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名（注：学位論文題名が英語の場合は和訳をつけること）

うつ病を有した初産婦の育児体験
-出産後から産後 6 か月までのインタビューを通して-

学位の種類：　修士（看護学）
東京都立大学大学院
人間健康科学研究科　博士前期課程 人間健康科学専攻　看護科学域
学修番号 18894707
氏　　名：丸山 祐佳
（指導教員名：安達 久美子　）

注：1 ページあたり 1,000 字程度（英語の場合 300 ワード程度）で，本様式 1～2 ページ（A4 版）程度とする．

**目的**

近年，母親のメンタルヘルスが母親自身と子どもに影響を及ぼすことは明らかであり，適切な支援が求められている．これまでの周産期メンタルヘルスの研究では，産後うつに関する研究は多数みられるものの，出産前から精神疾患を有した母親の育児や子育てに関する研究は少ない．精神疾患の中でもそれぞれ特徴があるため，本研究ではうつ病に焦点を当て，出産前からうつ病を有した初産婦が，どのような育児を体験しているかを，産後 6 か月までの計 5 回の半構造化面接を通して明らかにすることを目的とした．

**方法**

本研究は，ライフストーリー法を参考とした質的記述的研究デザインである．出産前からうつ病を有した初産婦 4 名を対象に，産後 4 日，産後 2 週間，産後 1 か月，産後 3 か月，産後 6 か月の計 5 回の半構造化面接を行った．分析はナラティブ分析を用いた．

**結果・考察**

本研究で，うつ病と向き合いながら，初めての子育てを通して母親となっていく個々の体験が明らかとなった．【サポートが少ない中でも子と共に母親として成長した A 氏】【精神症状悪化の中でも懸命に子育てを行った B 氏】【自分自身の健康を保ちながら母親の役割を見出し全うする C 氏】【サポートの重要性を感じながら徐々に育児環境に適応した D 氏】，4 名の縦断的なストーリーが明らかとなった．出産後から産後 6 か月間，母親たちは様々な困難や葛藤を体験し乗り越えていた．最終的には A 氏，C 氏，D 氏は子育てを肯定的に捉えられていた．B 氏は，精神症状の悪化があり，産後 3 か月までのインタビューとなったが，懸命に子育てと向き合っていた．母親たちは，自身の精神症状と向き合いながらも懸命に子育てを行い，母親としての役割を全うしようとしていた．

母親たちは，疲労感を自覚していても，自ら休息をとることが難しく，子育てにおける自己肯定感が低い傾向であった．しかし，子どもの気質や成長を理解することや孤立を防ぐこと，自分なりの子育てを認識することで，徐々に子育てを肯定的に捉えていった．

助産師は，母親をとりまく環境や心情を積極的に理解し，個々の重症度や体験に即して継続的に支援する必要性が示唆された．